

ブラジル人に野菜を食べる習慣もないために、料理教習会から始まるのだ。

日本人移民の神通力とも言われる三白農業（米、卵、蚕）の技は、全く無力なアマゾンアの都である。あまりに美味しい淡水魚類が市場を席卷しニワトリの卵など見向きもされない。一般家庭の主食はマンジョカイモ *mandioca* であり、高品位の米を買う人はいない。

ところで草分移民は、仏教の「自然 共生」の生命賛歌の教えに従い、原生林に敵対しない適地技術を練磨していた。

森林伐採に始まる開拓農家は、まず家の周囲に果樹を植え、次第に果樹の森を形成する。永年作物を育てる耕地も、樹木密度を高めて森に還元してゆく。それを森林農法と呼ぶ現代に、改めて開拓農民の余暇の活用の福德を知る。

かつて過酷な開拓生活の中でも、俳句をたしなむ開拓農民の姿は、大農園を経営するブラジル貴族社会には、驚愕すべき東洋文化であった。

農村指導者までもボロをまとい、経済的苦境に喘ぎながら、洗練された詩（俳句）を創作することなどラテン諸国には絶対に有り得無い。

サトウキビ、コーヒーの大農園経営が基準となり、農地と農奴は使い捨てが、当たり前の風土では、農地と労働者を労わり慈しむ発想は存在しなかった。

アカラ移住地は、胡椒 *Piper nigrum* の価格の暴騰により経済発展を遂げるが、子弟の教育を充実させ、郷土愛を育み、植物との対話に余念がなかった。

俳句は、気象予想の感性を高め、農作業暦に活用すべく開拓者に愛好される。

開拓当初、原始林を伐採すると地力の消耗が凄まじいこと、それは「草」が存在しないために裸地になるからである。南拓試験場も、後続移民も、祖国の草の種子から郷里の「郷愁植物」まで持ち込み、豆科植物、緑肥植物の楽園を形成させている。それは植物の遷移指向を活用する森林農法への道標である。

高邁な東洋の理想、定住農業を実現する資金は、胡椒栽培から生まれた。

日本人移民集団が「化外の土地」に産業を起こし、地域有数の高額納税者となると、はじめて舗装道路の開通と農村電化は実現するのだ。

ひたすら愚直に胡椒栽培に励んだからこそ、現地の信頼を獲得し、多様な熱帯果樹の生産に移行するにも技術的な問題は生じない。一つの作物を10年以上育て、はじめて百姓への道は開かれると言う。現地の農村労働者に胡椒栽培の技術を惜しみなく推譲し、農民として自立させるのも変人扱いされる。

拓くべき原始林に囲まれている開拓初期から、農村が森を主体に進化発展することを予想し、未来景観を描く才能は、日本農民の特質かも知れない。

厳しい日射を和らげ、木陰での集約労働を尊しとする気質は、水源林に対する畏れとともに、教養高き人を集め、清潔で犯罪のない街づくりに繋がる。

移住当初は大陸式の大規模農場経営に憧れていても、作物が本格的収穫期を迎える頃、日本人は初めて自分の農場が国際相場に翻弄される恐怖に晒され、追い討ちをかけるが如く、凄まじい病虫害に遭遇し破産する者も続出する。

原始林の中の無医村では、ようやく安定した農場経営が、家族の怪我、病気により一瞬にして消滅してしまう事例には事欠かない。